

平成22年度
印旛郡町村会県外視察研修 報告書

期 日 平成22年11月18日～19日
視察先 開成町（神奈川県）
川上村（長野県）
参加者 小坂酒々井町長、岡田栄町長
幡谷酒々井町総務課長、鈴木栄町総務課長
（小池酒々井町運転手）



開 成 町

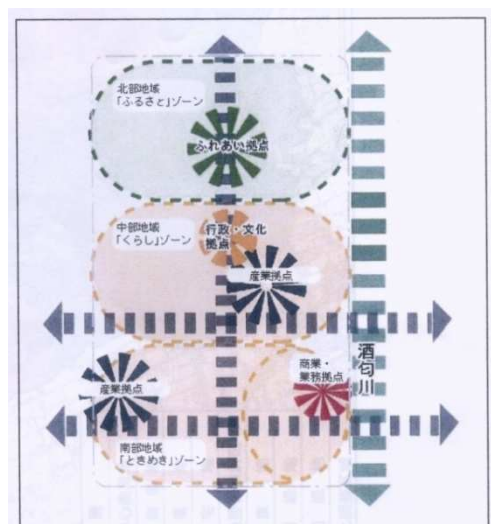
H22.11.18 視察

開成町の土地利用

開成町は、1960年に町内全域を都市計画区域決定し、町を3分割することにより、北部地域は水田を残すエリアで、農業振興地域として農業基盤総合整備事業、農業環境総合整備事業により、道路、水路、農村公園等が整備されている。

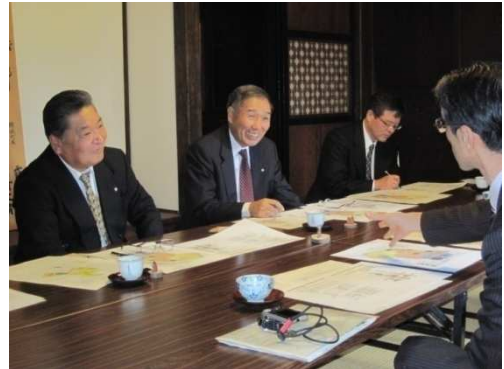
中央部地域は公共施設を集積するエリアで、住宅地、業務地、商業地として町の中心地となっている。

南部地域は新たに開発するエリアで、調整区域と市街化区域に区分されており、昭和63年に開業した小田急線開成駅周辺は、平成8年3月に完了した土地区画整理事業により、新たな町の玄関口となっている。



開成町のまちづくりの特色

1. 町の財源確保については、まず企業誘致に取り組むこととし、隣接する市に広大な製造工場を有する富士フィルムの研究所誘致に成功し、2006年4月に操業が開始され、当初600人の研究員であったが、現在は800人で関係者を含めると1000人を超える人が働いている。法人税収も研究所の誘致により5億6千万円ほどの効果をもたらしたが、2009年のリーマンショックにより、富士フィルムも直撃を受け、税収は一気に落ち込みゼロとなり、町は厳しい財政運営をしなければならないなど、法人税に依存する財政構造の厳しさも経験している。
2. 「教育の町」宣言に基づき町民の目標を一つに結集するため、新小学校の建設に取り組み、それに合わせて学校周辺の組合施行による土地区画整理事業の推進を決定した。最新の設備を備えた新小学校を建設し、教育施設の充実とともに小学校を核にした新たな街の創造と推進を図ろうとしている。
3. 住民と職員による協働のまちづくりの推進として、地域コミュニティの活性化を図るため、本年4月から自治活動応援課を創設して自治会支援を強化している。13ある自治会に対し、全職員を自治会サポーターとして位置づけし、担当自治会を決めて側面からの支援を行っている。



町内施設見学の中での見どころ

瀬戸屋敷

江戸時代初期より300年続いた瀬戸家の古民家を敷地1800坪と建物を含めてすべて寄付を受け、国、県の補助金を活用して4億4千万円の事業費で再生を行った。自由に利用できるなど入場者は年間5万3千人を超える状況である。



あじさいの里

17ヘクタールの水田の農道わきに植えられたあじさいは約5千株で、このあじさいの里を会場に昭和63年から毎年6月に「開成あじさい祭」が開催され、期間中は県内各地や東京から多くの観光客が訪れている。



パークゴルフ場

酒匂川河川敷にある「開成水辺スポーツ公園」にはパークゴルフ場があり、開成町では「町民生涯一スポーツ運動」の核として普及に努めている。また、開成水辺スポーツ公園は、平成22年4月から指定管理者制度を導入している。

川上村の土地利用

川上村は、総面積209.6平方キロメートルに対して畑が1,735ヘクタール8.3パーセントで、山林が国有林を含め18,596ヘクタール88.7パーセントを占めている。厳しい高所での自然条件を活かすため高原野菜栽培に着手し、現在では村の基幹産業となり、特にレタスは全国一の生産量を誇っている。

川上村のまちづくり特色

農家戸数607戸で、全世帯数の半数を占めている。一戸当たりの平均耕作面積は2,3ヘクタール、平均年収が3,000万円で、1億円以上の年収となる農家も数戸ある。

農家数は減少傾向にあるが、耕作農地面積の減少はなく、20歳から29歳の農業従事者の割合が国平均のおよそ4.2倍と高く、農業後継者の定着率は極めて高いものとなっている。

このことは、農業の経営基盤の確かさにより高収入が望めることのほか、後継者の配偶者確保に努めることで、若者や女性に開かれた村づくりを進めている結果と言える。また、後継者の70パーセントが大学卒業者で、川上村以外からの後継者の配偶者が70パーセントとなっており、千葉県からも農業経験のない女性が嫁いで野菜の生産に従事している。

このほか、農村社会として生き残っていくための対策として、CATV回線を利用して村内のパソコンと結ぶ農業ネットワークの構築、畑地かんがい100パーセント及び下水道普及率100パーセントの達成、村営診療所による村民の健康管理や健康づくりの支援対策とその結果としての医療費削減に成果を上げている。



[今後の課題]

1. 農家の所得格差と販売戦略に行政が主導で行うことの必要性
2. 野菜価格の低迷や消費者の野菜離れによる生産者の意欲低下の懸念等
3. 海外への新たな販路拡大（既に台湾・香港・シンガポールに販路有）と海外で通用する川上ブランドの確立

村内施設見学の中での見どころ

川上中学校

事業費27億円のうち村費3億円で建設することができた。学校建設は文部科学省の所管であるが、体育館と音楽室（音楽堂とも称す）については、コミュニティスクールとして地域の人達との交流を図れる多目的な施設とすることやエコスクールの認定を受けるなどの多様な建設手法を取り入れたことから、国土交通省、林野庁、長野県等より補助を受け複合多彩な施設として建設されている。



建築材は、川上村産の唐松を用い建物の構造、外装、内装に大量に使用するとともに、生徒の机、椅子等の家具にも使用している。

特に音楽堂は、結婚式場にも使用することができるよう、パイプオルガンが設置されており、校舎の中庭はバージンロードとして使用できるように造られている。

川上村文化センター

村民の文化活動の拠点として、演劇、講演会など多目的に使用できる最大500人収容の「うぐいすホール」、6万冊収蔵の「図書館」、「ハイビジョンシアター」、「お茶室」等を備えた複合施設となっている。エントランスを入ると「からまつ広場」という多目的に利用できる空間があり、吹き抜けは施設の開放感を感じさせる。



図書館は、24時間利用可能な図書貸し出しコーナーが設置されている。